

川崎ジュニア文化大賞受賞作品

「ししまいとボクの未来」

東菅小学校 5年生 木村 守

「ボー」

今年もまた、じいちゃんのほら貝の音になった。そのあと母さんが笛を吹く。その音色にあわせて、兄ちゃんがししを舞いおどる。

ししまいを見るのがボクの毎年の決まり事。菅の町には、800年以上伝統を受けつぐ、ししまいがある。産まれた年から、ベビーカーに乗せられて、母さんが笛を吹くとなりでししまいを見ていた。気がついたら、天狗のおどりをおぼえていたボクは、小学校一年生の頃から、大きくなったら天狗になると心に決めていた。

ボクの決心は、まだだれもしらない。体の小さいボクは、まだまい手にはなれないようだ。くやしいから、だれにも言わない。

運のわるい事に、ボクはペルテス(骨の病気)になってしまい、おどることができなくなってしまった。

二年生の終わりの頃から、五年生になった今もペルテスは、完治していない。いったい、いつになったら治るのか。ドクターは二年間と言っていたのに、まだだめだ。早く練習がしたい。兄ちゃんが、

「練習をはじめても一人前になるには、五年くらいかかるらしい。」
って言っていた。800年の歴史からすればボクの病気は、いっしゅん。ボクには、ながすぎるがまん的时间。

兄ちゃんは、おどりはじめて二年。本当はいっしょにおどりたい。ボクが天狗で兄ちゃんがししを舞う。菅の伝統を兄弟で受け継ぐ。それがボクのペルテスと戦う力になっている。

二年生の頃、二ヶ月入院して、重い装具を付け退院した。右足にはいつでも装具が付いている。学校でも家の中でも、今は装具がないと一人でトイレにも行けない。筋トレだと思ってあきらめるしかない。とにかく、骨を守って、足を治さないと天狗にはなれない。

今の時代、伝統芸能がつづくのはむずかしいとじいちゃんが教えてくれた。菅のししまいも天狗一人としし三人。他にも笛の人、歌の人、ほら貝の人、たくさんの人が必要だ。昔は、土地の人しか参加できなかったらしい。今は、菅に住んでいる新しい人たちも、参加できるようになった。

あともう少し、骨がかたくなって、ペルテスに勝ったら、ボクが天狗になる。じいちゃんと母さんがだす音色で、兄ちゃんとボクは力強く舞いおどる。

菅の伝統を守るため、ボクの名前は「守」になったと自分では思っている。兄ちゃんと二人、新しい時代にあった伝統を作り、守っていく、それが目標だ。

90才をすぎた、じいじが元気なうちに、ボクと兄ちゃんが舞うししまいを見せてあげたい。

ペルテスになんて負けないよ。ペルテスを治し、天狗になる未来が、ボクにはもう、見えている。